



アカシア俳句会



令和三年 夏季俳句会 「句評」 兼題「新緑」 および夏季語 令和三年六月

一、「特選句」 選定句評

○雨宿り雷光一閃生き地獄

戸堂博之

◆昔むかしのこと小学生時代か、子供たちで登った山で天候急変に会い生き地獄を経験したことを思い出させてくれました。

西村敏治

○ニセアカシアちぎり占ひ幼き日

加龍恵子

◆三丘生のシンボルを上手く詠みました。ちぎり占いが特に見事!!

戸堂博之

○青蛙三回跳ねてはひと休み

本多通博

◆作者の観察眼がリズム感よく軽やかに詠まれているところが良い。何事にも一休みの八十歳代には身につまされる。

元永悦子

○こんにちは代わりの言葉はワクチンは？

吉澤志保子

◆今の世相を如実に詠った句です。気持ちがびたりきました！

岩崎悦子

○緑さす支笏湖畔のチップ釣り

都 福仁

◆支笏湖に出かけて、虹鱒釣りをする趣味を持つ人が当俳句会にもおられるとは驚きでした。素晴らしい俳句でした。

本多通博

○病院の二棟貫く梅雨の廊

佐藤多恵子

◆四角い病院の建物の間を貫くガラス張りの渡り廊下が雨に濡れている。何故かその光景がいつまでも目に残り、切ない。

野本展子

○老後又かくて二人や柏餅

中野陽典

◆この句のような老後がなかったので、ただただ羨ましい日々の句にひかれ選びました。

富岡訓子

○良縁の朗報を聞く桐の花

中野陽典

◆この時期に明るいい心華やく句だなあと心に残りました。季語の桐の花がびたりと思いました。

加龍恵子

○一山を波濤と化して青嵐

中野亘子

◆山の木々が青嵐に大きく揺られて波濤となったという大景を捉えたところに実力を感じる。直感、写生の優れた作。

佐藤多恵子

○終戦忌彼の日の青き空想ふ

中野亘子

◆彼の日の記憶は私も鮮烈です。戦争に負けても何も変わらず、陽が照り蝉が鳴き垣内（屋敷内の畑）ではナスや胡瓜が実っていた。

山家由紀

○想像も出来ぬ宇宙の広さ露をむく

山家由紀

◆指先を注視しながらの作業中、コズミックフロントなどで視た広大で幻想的な画像の宇宙を思い浮かべられたと拝察しました。

岩壺克哉

○涼しさや木の香こよなき下駄工房

田村登代子（協賛参加）

◆木の香りが、作業場いっぱい、出来上がった下駄を交互に積み上げたありさまが、目に浮かびます。

吉澤志保子

○えごの花咲きて小暗き並木道

田村登代子（協賛参加）

◆真つ白く香り豊かなエゴの花の明るさと小暗き並木道の対比が鮮明で、情景がはつきりと見えてくるよい句です。

前田秀一

○風鈴をテントに吊るし陶器市

田村登代子（協賛参加）

◆散歩がてらの一時を楽しむ様子が目に浮かび、風鈴を日除けのテントに吊るした描写は上手だと思います。

都 福仁

◆テント張りの陶器市の状況がしっかり目に浮かび、吊り下げられた風鈴が風に揺れている光景が見えるようです。

楠野圭子

○草庵の庭に十葉湧く」とし

田村登代子（協賛参加）

◆静かな境地の作者・穏やかな日々の中、どくだみの茂る速さを特別に「湧くがごとし」と感じられたのでしょうか。

中野亘子

○新緑の木々高々と水戸の街

吉田以登

◆表現の巧まぬ巧みさ。新緑頃の木々成長の勢いを余す所なく表現されて。水戸は緑豊かな風格ある町と想像。

網 裕子

○夏草や遠い記憶の匂ひ立つ

野本展子

◆「夏草の匂ひ」は中学時代以来キャンプの際に草の上で大の字に寝た多くのテント生活を思い出させてくれます。

佐藤茂弘

○新緑を難聴の我より深む

西村敏治

◆五感が1つでも衰えると残りの感覚が研ぎ澄まされ、難聴が新緑をより素晴らしいものにしてくれたのでしょうか。

三木徳彦

○新緑に老ひも連れ立ち薄化粧

前田秀一

◆新緑のよい気候に誘われて、老いてもちゃんと薄化粧して行かれる。素敵で、「薄化粧」がよく効いている。

吉田以登

二、協賛特別参加 俳人・田村登代子様（三丘一四期生）からのお便り

前文失礼致します
 何の由役にも立ちなりましたのに早速
 アカシア俳句会「の夏季俳句会」句報
 句評を下さり頂き、ありがとうございます。
 前田村には、私の好きなの句、「えんの花
 咲きつて小晴き、並木道」を特選に
 応募して下さり頂き、また句に余る句評を
 頂き、感謝しております。
 また、皆様の「丁寧な特選句評を

汲み頂き、とても嬉しく思っております。
 俳句の楽しさ、反物をよく見て、真実を察見し
 心を源として創造する、と、だと思っております。
 そして心のつらさを曝け出す、なげは、ありません。
 また、己の生き方や暮らしぶりが、絶えず
 問われております。あつちを踏まうとして
 楽しく俳句を学んでゆきたいと思っ
 ています。
 ますます、向かいます。ご健康を祈り

いたします
 アカシア俳句会のご快答をお待ち
 いたします
 六月十日
 田村登代子
 （三五十四回）

前田秀一様



この俳句の記録について
 昭和六十二年四月、鷹羽狩行先生主催の「狩」に入会させて頂
 いてから、平成三十年十二月の「狩発刊」までの「狩」に掲載され
 た句と、狩行先生、片山由美子先生が選者になられている俳人協会や
 NHKその他の句会に投句して入選等した句を主体に、他の先生方
 の選になった句も含め、記録として掲載しました。
 片山由美子先生が、私の俳人協会俳句大賞を頂いた時の紹介で、
 「花にたとえるなら登代子さんは『向日葵』のよう」だと言って下
 さったことが大変うれしく、今回の記録の題を『向日葵』とさせて
 いただきました。
 孫達にも読んで貰いたいので、難解な用語にはルビを付けました。
 このまとめには、主人が全面的に協力してくれたことに感謝して
 います。

- 田村登代子 旧姓・吉竹、三國丘高校・十四期生
 昭和十八年（一九四三年）一月一七日、大阪府堺市生まれ、
 昭和六十二年四月「狩」入会
 平成六年一月「狩」同人
 平成六年四月・俳人協会会員
 平成七年・毎日俳壇賞受賞
 平成十一年・第五回俳人協会俳句大賞受賞
 平成二十年・「狩」三十周年記念全国俳句大会大会賞受章

三、「気づきのひとこと」

佐藤多恵子

昔、俳句結社「京鹿子」(*)で学んだことを思い出しながら、「選句」資料(無作為配列)掲載作品について気づいたことをメモしてみました。

*: ブログ投稿「俳句結社〈京鹿子〉編『歳時記』への道」佐藤多恵子参照

「実」のなる木の「花」、例えば、「みかんの花」や「南天の花」では、「花みかん」や「花南天」というように「花」を上冠して表現します。単に、「みかん」とか「南天」とか表現しますと、「実」を表す場合となり、作者の心が鑑賞者に伝わらないことがありますので注意が必要です。

○ニセアカシアちぎり占ひ幼き日 ↓ アカシアの青葉をちぎり占ひき

◆ニセアカシアでは、「花」を表すことになる。この占いは、幼い日の回想だから、確かな過去を意味する助動詞「き」を用いるとよい。

○コロナ禍や無言の目線花アカシア

◆『新版 季寄せ』(角川書店)二〇二頁掲載「アカシアの花」の子季語「花アカシア」を使用し
たよい例。

○マスク越し密かに香りレモンの花 ↓ マスク越し密かに香り花レモン

○紛れてる豌豆(えんどう)花に小さき蝶 ↓ 紛れてる花豌豆に小さき蝶

◆以上二句 「○○○花」 ↓ 「花○○○」

そのほか、句の構成を変えるとよくなるのではと気づき添削してみました。

○雨蛙郵便箱の中にな ↓ 郵便箱の中にちよこんと雨蛙

○訪ひし初夏師亡く淋しむ著書熱し ↓ 初夏(はつなつ)や今は亡き師の著書熱し

「訪ひし」:省略も必要。「淋しむ」:直接的に詠まなくてもよい。

○伊吹見ゆ虹片足は湖の中 ↓ 伊吹見ゆる虹片脚は湖の中

「伊吹嶺や」でも良い。

○橋に立ち河流れゆき風薫る ↓ 薫風や川奔りゆく橋に佇つ

「風薫る」を「薫風や」に代えて川の描写を浮き立たせましょう。

○新緑に老ひも連れ立ち薄化粧 ↓ 新緑に老も連れ立ち薄化粧

名詞では「老」だけで良い。文語動詞では、ヤ行上二段活用:「老いず」(未然形)、「老いたり」(連用形)、「老ゆ」(終止形)、「老ゆる」(連体形)、「老ゆれども」(假定・已然形)、「老いよ」(命令形)と活用します。

四、「編集後記」

高齢者のワクチン接種も軌道に乗り、コロナ禍も先の見通しが窺えるようになってきました。十一月の総会時期には、なんとか母校近隣でも吟行が出来ればと望みを期しております。

夏季俳句会は、会員の皆様の俳句にかけると熱い思いに支えられ、さらに佐藤多恵子さんのお計らいで三丘十三期同窓の俳人・田村登代子様の特別協賛ご投句もあり計十七名・八十五句と多くの投句があり、充実した俳句会とすることが出来ました。ありがとうございました。

「選句」にあたっては、ただ単に投句数が多いばかりでなく、秀句も多くありご苦心があったのではと推察いたしております。いかがでしたでしょうか。

同期の俳人・土生重次「語録」では、俳句は「感」・「観」・「勘」に思いたし、ものに託して心（感動）を詠う文芸であるといわれています。「特選句」選定に至る句評を拝見しますと、皆さんそれぞれに思いたすところが反映されていて素晴らしいと思いました。

本来なら、元「金剛俳句会」主宰・中野陽典さんに作品全体に目配りしてご講評を戴くことにいたしておりましたが、ご事情がありそれが叶うことが出来ておりません。追って、ご寄稿があり次第追加して掲載させていただきます。ご理解ください。

幸にして、かつて俳句結社〈京鹿子〉に入門され学ばれた佐藤多恵子さんから「気付きのひとこと」としてご寄稿をいただきました。

ちよつとした気づきですが、それを意識するかしないかで描写情景が大きく変わるといふ俳句独特の表現の世界があることに気付かせていただきました。今後の作句および俳句鑑賞においてご参考にしていただけたらと思います。

俳句会は、作句の苦しみがある一方、作者の思いを慮る鑑賞力を養う「場」でもあり、相互の思いを通わせる「場」として生きがいに活かしていただければと思っております。

編集人 前田秀一